

「 豪雨の経験に学ぶ 」

鹿児島県 日置市立上市来中学校 2年 久保 凛之助

その日、僕はいつもとは違う、慌ただしく響く雨音と足音、雷鳴の轟音にたたき起こされた。特に足音が気になった僕は、ムックリと起き上がったが、みんな何をしているんだろう、と寝ぼけ気味で、いまいち状況が把握できずにいた。父か母のどちらかに聞こうと立ち上がって窓の外を見たら、一気に目が覚めた。いつもとは明らかに違って、川が、あふれるギリギリの深さまで上がっていたのだ。響く足音が、さらに一人分増えた。

小学5年の夏、家の前の川に石を投げて遊んでいたとき、祖父が声をかけてきた。川岸に座って、じっくりと話を聞いた。約20年前の、8・6水害のことだった。大雨が降ってこの川が増水したが、気がついたのはあふれる寸前だった。祖父や父、近所の人たちは体一つで避難をして、自分たちの命を守ることができたそうだ。ただ、家の床下は完全に浸水していたという。初めて聞く話だった。祖父がありありと語る避難の怖さと、目の前の穏やかな川の様子が、僕の中ではなかなかみあわなかった。

「この川が、こんなふうになるのか。」

驚きと同時に、

あのときの祖父の話からイメージした光景が、この朝、見事にかみあってしまった。

家族のそれぞれが慌ただしく動きながら、避難の準備と避難場所を確認し合って、避難を始めた。車で通る道端からは、すっかりと水没した田んぼや、決壊した土手、20メートルを越す高さからの土砂崩れなどが次々と目に飛び込んできた。瞬間、身の危険を感じた。今、この車めがけて土砂がくずれてきたら……。津波に襲われた東北の町、豪雨に見舞われた広島町の町、テレビを通して安全なところで他人事のように見えていた景色が、今、車の薄いボディの外側にある。身の危険。このとき初めて、死、という考えが僕の頭をよぎった。

あれから一か月経った。今振り返ってみると、そのときの僕は身の危険を感じていたものの、避難の仕方はまるでダメだったと思う。まず、気付くのが遅かった。増水に気付いてから、準備をしたり避難場所を決めたりしていた。常日頃から、準備と場所の確認などの備えをしておかなければならないと、心底感じた。それ以上に、危険な状況になってから、どうしよう、どうしよう、みんな何してるの、僕は何をすればいいの、と慌てたり親からの指示を待つばかりで、何をどうすればいいかという具体的な動き方が分かっていなかった。というよりも、考えられないパニック状態になってしまっていた。「今どういう状況で、この先どんな恐れがあるから、何を持ってどこに行くか」などのことを、ピシャッと正確に判断してすぐ行動できる判断力・行動力が必要だ。助かった今だからこそ、今回の災害から学んで、今後に備えておこう。

ふと思った。祖父はなぜ僕に8・6水害の話をしてくれたのだろうか。いや、そうではなくて、僕が、祖父の話から、何かを学ぼうとできていたのだろうか。僕は、祖父が語ってくれた恐怖体験を、ただ聞き流してしまっていただけだった。それはなぜだろう。

残念なことに、人間は自分が経験したことからしか学ぼうとしない、弱い生き物だ。過去にどれだけ多くの方が被害にあっても、たとえ身近な立場や場所で被害が起こっても、どうしても他人事というか、自分の身にはそんなことは起こらないだろう、なんてことを勝手に思い込んでいるのではないだろうか。だから、僕はある意味幸いだったと思う。災害に遭っても被害がなかったことと、今後のための教訓となる経験ができたことという、二つの意味で。

我が家では、この一か月の間に、避難グッズを備えた非常用バッグ、ハザードマップと避難場所とそこまでの経路の確認を終えた。家族全員が「そのとき何をするか、どこに行くか」ということを理解できている。そしてもう一つ僕ができることは、そこまでの危険を経験していない人へ、自分の体験と備えが大事だということを語ることだ。祖父が僕に教えてくれたように。

もしかしたら、当時の僕のように聞き流されるかもしれないけれど、それでも、何かが起こったときには、何が役に立つかわからないものだ。だから、頭の片隅によぎってくれるように、持ち物

令和元年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

や避難場所などを具体的に、何度も何度も語ればいい。しつこいと思われるかもしれないけれど、それが、防げるはずの大きな被害を防ぎ、守れるはずの命を守ることにつながるということを、僕は信じている。